

日本植民地時期台湾における国際観光の成立

根橋 正一

はじめに

これまで論じてきたように〔根橋, 2004a,b,2005〕, 現代アジアの国際観光はヨーロッパ「世界経済」のアジアへの植民地的拡大とともに誕生したと考えられるが, 本稿では台湾における国際観光の成立とその特徴について検討する。

台湾は外部の帝国主義国家に支配される2回の体験をもった。すなわち, 17世紀におけるオランダ等のヨーロッパによる支配と19世紀末から20世紀前半の日本帝国による支配とである。本稿は, 日本帝国時代に展開された経済的な動向とそれと連動する日本的な都市形成, および観光と結びつく可能性のある条件の形成について整理することを課題とする。すなわち, 日本人の観光目的地としてふさわしい安全・安心・快適・便利・清潔といった諸条件からみて良好な生活空間がここに形成されたことを示そうとするものである。そのために, まず重商主義帝国オランダによる都市形成について着目し, それを日本支配時代に建設された日本人居住都市との比較の視点から整理する。観光者, 旅行者の受け入れを可能にする都市および生活環境の形成をみることがなかったオランダの砦について, その構造と背景について述べる。これによって, 2章以下述べる資本主義帝国日本の台湾経営, 都市建設とは対照的であることが理解されよう(1章)。日本支配時期の台湾経済の役割, その役割を果たすために建設された鉄道や航路などの交通網および日本人移民の動向に注目(2章)したうえで, 台北における日本人の生活空間の形成および娯楽生活についてのいくつかの取り組みについて整理する(3章)。次に温泉観光地としての開発される北投についてみていく(4章)。5章では観光地台湾の形成について総括的に述べる。

1章 17世紀オランダのゼーランジャ城と経済活動

1節 オランダの重商主義政策

1. オランダの東方経営

ヨーロッパ「世界経済」においてオランダが、ヘゲモニー国であったのは1625年から1675年にかけての時期であった[Wallerstein,1980=1993:45-46]。オランダが台湾を領有していた時期(1624年~1661年)は、まさに本国ではヘゲモニー国であった時期と重なっていた。オランダのアジア戦略についてウォーラステインの分析から整理しておく。

オランダの東方貿易は、1598年インドに向けて貿易船が出発したときに始まり、1602年までに連邦議会はオランダ東インド会社に特許状を付与した。認可の目的はさまざまあったが、当時のヨーロッパでは得られないほどの香辛料を獲得したいという希望もあった。インド洋海運の主要ルートは、北半球の紅海・ペルシア湾ルートから、南半球のケープ・ルートへ移行していた。これに対応する航海技術を持っていたオランダ人はこの機会をとらえることに成功した[同上書:52-53]。しかし、オランダ人はこの貿易に参入したとたん、外部世界との貿易につきまとう根本的問題につきあった。すなわち、この貿易は奢侈品貿易であっただけに、その利益は高く、競争も激しかったが、扱う商品が奢侈品であって必需品ではなかったがゆえに、市場は本質的に狭く、深刻な過剰供給の可能性があったのである。このディレンマを解決するための方法は2つしかなかった。

すなわち(1)東インド地方を資本主義的「世界経済」にその辺境として編入して、貿易の性格を変えてしまうか、もしくは(2)世界帝国間の遠距離貿易において伝統的となってきた「管理貿易」に依存するかのいずれかである。このどちらのコースをとるべきかが論争の主題となった。初代バタヴィア総督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンは前者の立場をとり、東インド会社の重役会「一七人会」は後者の案を推進しようとした[同上書:53]。

クーンによれば、東インドの辺境化には二つの意味で植民政策が不可欠である。すなわち、アジア人支配者を抑え込み、生産システムを再編するために政治的コントロールを確立することが必要だし、換金作物の栽培を管理しヨーロッパ商品のための最初の市場を確保するためにも白人の植民者を送り出すことが必要であった。また、クーンはこの政策は管理貿易とは両立せず、市場原理を自由に作用させることが不可欠であると論じた。

二つの論争はいいかえれば、問題は搾取による利潤を確保するか、投機による利潤を狙うかということであった。短期的には投機による利潤を好む人びとが優勢であったが、長期的には生産過程での搾取こそが資本主義的「世界経済」の先頭に立ち続けるための唯一の基礎となりうるものであった[同上書:53]。オランダの初期の主要関心事は、アジアとヨーロッパのすべての市場に参入する貿易路を確保すること、オランダ東インド

会社など自国の商人や商社が商業的な利潤を攻撃的に追求できる能力を維持することであった [Wood,2003=2004:117]。すなわち、投機的利潤を優先していたのである。しかし、やがてイギリスやフランスなど競合する国の企業がオランダの商業的な優位を脅かすようになると、植民地への入植に関心を持つようになった [同上書:117]。こうして、オランダ・イギリス・フランスなど中核諸国は18世紀になるとインド洋地域の辺境化に乗りだし、1750年以降それが定着した [Wallerstein:53]。

オランダが台湾に進出して、台南周辺を支配したのは投機的・商業的利潤に関心が向いていた時期であった。

2. バタヴィア建設

オランダのアジア戦略についてバタヴィアの建設の過程をみると、クーンの思いと本国の資本家たちとの葛藤の中で当時の植民地経営の姿が鮮明になる。

マルク諸島のポルトガル勢力を駆逐したオランダは、1641年ジョホールの協力を得てムカラを占拠した。そして、17世紀後半に島嶼部においてもっとも優位な地位を獲得した。しかしオランダが胡椒取引のシェア拡大に成功した1670年代にヨーロッパ市場で胡椒の価格が暴落した。それ以降オランダがヨーロッパにもたらす商品の中で、胡椒はその重要性を失った。こうしたなかで、バタヴィアは胡椒の中継港から、後背地で生産された砂糖やコーヒーを輸出する港市へと変容し始めた。とりわけ砂糖は17-18世紀に東アジアをはじめ西アジア、さらには南アジアで需要が増大し、バタヴィアはじめジャワ北岸港市の後背地で栽培が盛んになった [弘末雅士, 2004:54-55]。

バタヴィアには当初よりオランダ人をはじめ中国人、南アジア出身者、マレー人やジャワ人、バリ人やアンボイナ人などの他のインドネシア地域出身者など多様な人びとが居住した。1673年の統計によればバタヴィア城内の人口27,068人のうち、最も多いのがマルディケル（旧ポルトガル領下のインドやムカラ出身で、キリスト教徒となり解放された奴隷）の5,362人であった。彼らはオランダ東インド会社の職員や兵士、牧師や商人などの職についた。続いて中国人が2,747人を占め、第3位のオランダ人は2,024人ほどであった。その次にムスリム住民およびジャワ人の1,339人、バリ人981人、欧亜混血者726人が続き、奴隷が13,278人いた。中国人は東インド会社の中国中継貿易の進展とともに移住者が増加し、1699年には3,679人いた [弘末雅士, 2004:55-56]。アジアにおけるオランダの中心都市であったバタヴィアにおいても、オランダ人やヨーロッパ人入植者のコミュニティーが形成されていたわけではなかった。

2節 オランダの台湾領有と経済活動

1. 台湾領有

1609年オランダは日本に平戸商館を設立した。1619年、オランダ東インド会社はバタ

ヴィアに総督府を設置し、東洋貿易および行政の中心とした。1622年、バタヴィア総督クーンは艦12艘、兵1,024名を率いてポルトガル人が占有していた澳門を攻め、澎湖への足がかりにしようとした。しかし、中国軍とポルトガル軍の抵抗にあって大敗したため、7艦のみを率いて澎湖に向かった。澎湖に築城して、漁船600艘を奪って運輸用に用いた。住民のなかには逃走を試みる者もいたが、ことごとく連れ戻された。この城は四方形で、各面とも56メートルあり、内側には29門の大砲が設置されていた〔台湾省文献委員会,1996:66-67〕。オランダは澎湖を基盤として経済活動を展開したが、清政府はこれを嫌い退去を要求した。オランダは、1623年2艘の船で大員（安平）を調査し、同年のうちに提督が兵を率いて来台して、大員に竹砦を建築し、116人の軍を駐留させ、防備にあたらせた。また、1633年には、ゼーランジャ城を完成させ、中心地を澎湖から移した〔同上書:70〕。

城内には、総督の住宅・教会・監獄が設置され、食料や武器を貯蔵する倉庫があった。ゼーランジャ城の前衛としてウトレヒト砦を建設し、北側の対岸にはボクセンベイを設置した。「大港」は水深が深く、赤嵌河にそった地域に東インド会社の宿舎・医院・倉庫が設置され、中国人商人の移住が奨励された。街市は繁栄しプロビンティアと呼ばれた。ここに移住してきた漢人はみな一鯤身およびボクセンベイあたりに居住した〔同上書:71〕。ここに居住した人口については、「ゼーランジャ城に居住するのは駐在する兵2,800人であった」とするものや、「オランダ公民600人、守備兵2,000人が居住した」、あるいは「官民600人、士兵2,200人」とする推計があるが、「城中には住むものは1000人を上回らない」ともいわれ、1660年の記録では「オランダ兵900名」と記録されている。1,000人以内というのが妥当であると考えられている〔同上書:72〕。

2. 台湾における経済活動

オランダの台湾における経済活動について整理しておこう。

オランダ人の支配は前後して建設されたゼーランジャ城・プロビンシャ城を基地としておこなわれた。そこには、商務・行政機構として商館が設置されていた。バタヴィア在住の中国人や日本の商人を招き寄せ、商業貿易を展開した。また、中国からの商人の移住も奨励し、漳州や泉州の商人たちが来集して、城外は次第に街市を形成していった。農民の余剰農産物はここに集中し、オランダ人の手を経て輸出されていった。中国人商人たちは大陸から一般的な日用品を運んだ。綿布や塩・鉄・煙草・火薬などの日常品は、原住民の狩猟の獲物や農産物と交換された。これが当時の台湾島内の中心的な経済活動であった〔同上書:93〕。

オランダの台湾における対外貿易相手は、主に中国大陸、第2に日本、そして南洋であった。連雅堂の『台湾通史』によれば、「物産は米と糖とを最大とし、その他もあった。中国ばかりでなく、遠く日本や南洋にまで運ばれた」。その商品をあげてみよう。

大陸から運ばれ、台湾で積み替えられる物資：絹織物・絹糸・陶磁器・薬材・糖など
台湾から大陸へ輸出される物資：日本およびヨーロッパから運ばれた銀、南洋から運ばれた香料・胡椒・琥珀・鉛・錫など。台湾の特産品の鹿の角・鹿の脂・籐など。台湾農業発展の後は米。

台湾から日本への物資：鹿皮。台湾農業が発展するとサトウキビ・糖など。

台湾から南洋への物資：台湾北部山の硫黄はカンボジアなど動乱の続く地区へ運ばれた。

南洋から運び積み替えて大陸への物資：バタヴィアから阿片を輸入し、大陸の広東・福建に販売した。

こうした貿易をおこなうことによってオランダは台湾において大きな利益を得ることができた。

1627年、台湾から日本へ向かった絹船は5艘、バタヴィアに向かったのは2艘、その総額は1,181,349グルデン3ストライバ12ペニーであり、その貿易の利潤率は100%であった。翌1628年には鄭之龍の乱や貨幣不足から貿易数量は激減したが、その後は回復した。1637年、世界各地から日本に向かうオランダ商船は14艘、貨物総額は2,460,733グルデン8ストライバであったが、そのうち台湾から運ばれたのは2,042,302グルデン以上で、80%以上を占めていた。1638年、中国大陸からの貨物が増加し、日本に向かう船は合計7艘、貨物総額は2,775,381グルデンであった [同上書:94]。

当時のオランダ人のペルシャとの交易にも台湾は大きく関わっていた。ペルシャへの輸出品の第1は糖、次に中国産の茶・人参、日本産の銅・樟脳であった。逆にペルシャからの生糸を日本に運んだ。さらに中国および日本の金をインドに運んだ。オランダは、これらの貿易からも大きな利益を得た [同上書:94]。

つぎに、オランダの台湾における農業開発についてみておく。

オランダは台湾において開墾を奨励し、農業生産の促進を企てたが、当時の「土蕃」の農業はまだ原始的な状態にあり、ほとんど自給自足的な状態にあった。農業を振興して輸出農産物を得るために、大陸からの移民を促し、來台・開墾・工作を奨励した。当時大陸東南沿海部は、抗清戦争のため戦乱が激しく、台湾に渡る者も多かった。オランダ人は東インド会社の船で移民者を運んだり、種々の得点を提供した。資金を貸し付け、耕作用の牛・農具・種・水利施設を与えるなどして、農業生産を促した。漢人たちは労働力および技術提供者として台湾農業開発の役割を果たした。この時に移住した者は10万人に達したとの推計もあるが、実際はそれよりかなり下回っていたと考えられる。台南周辺に、1638年当時漢人は1万人程度であり、開墾が進められた後35,000人から50,000人の漢人が台湾いたと考えられている。またこの時期に開墾された地域は、現在の台南市を中心として周辺の番社におよんだ。開墾された田園面積は9,800甲歩であった

た [同上書:89, 薛化元,1999:33]。

3節 ゼーランジャ城

1. オランダの台南建設

ここでゼーランジャ城など新たに建設された都市について整理する。伊能『台湾文化志』に記述にそって述べる。

1622年オランダ人は東洋貿易のために根拠地をシナ海に求め、ジャワのバタヴィアから台湾海峡に進み澎湖に上陸し砦を築いた。しかし、1624年明朝の抵抗に遭いこれを放棄し、同年8月台湾西岸に開ける台江に入り、台江河口に横たわる一島、一鯤身の海岸に仮砲台設置した。6年後、1630年さらに1城を島内の丘の上に建設し、防備としてゼーランジャ城と名付けた。中国人達はこれを紅毛城あるいは台湾城・赤嵌城・安平城と呼んだ。フランソア・ヴァレンタイン著『新旧東印度』4巻フォルモサおよびここにおけるオランダ貿易の記事によれば、「ゼーランジャ城の他、本城から見下ろせる近距離、すなわちピストルを発射すれば弾が着弾しそうな小さな丘に、ウトレヒトという方形の小砦を設けた。また、本城の北方約100メートル、もう一つは約60メートル離れた海浜にそって堡壘を築き、これを城の西の角および北の角に連結し、両角に大砲を据え、本城の堅固さを増した」という。『台湾府志』には、「紅毛城、オランダは一鯤身の頂きに小城を築き、そのふもとにも同じく小城を築いて外城とした。城壁には糖水を用い、灰から造った煉瓦を敷いたが、これは石のように堅固であった。そこに食糧などの備蓄すべきもの全てを貯蔵した。鉄製の釘を用いて、広さ277丈6尺、高さ3丈であった。城内は曲がりくねったり、上がったたり下がったりしていた」と記している [伊能:594]。

『台湾県志』外編遺跡に次のようにある。「赤嵌城、安平鎮一鯤身の沙跡にあり、海上に浮かび、西南のひと筋の海岸線ははるかに二鯤身に連なり、七鯤身に到って、府城に達する。明万暦年間末期にオランダは市場をここに設けて煉瓦城を築いた。城の広さは一辺176丈(1丈=3.33m)、高さはおよそ3丈の二階建てであった。鉄製の釘を用いていた。門は3カ所に設けられ、北門の額には字が刻まれていた。多分創業の年月など記したものであろうがよく判らない。城の上には大砲15門があった。下層には大砲4門があった。西城内の一つの井戸は、半分は見え、半分隠れていて、水は極めて清冽であった。西北の角周辺の建物を外城とし、海に到る。建物は上がり下がりし、曲がりくねり、……。ところで、北門に刻まれた文字は、オランダ人の記録によれば「The Zeelandia Gebowed Anno 1630」であった。

ゼーランジャ城建設の20年後の1650年、オランダは台江内部の沿岸赤嵌に砦を増設し、

プロヴィンティアと名付けた。漢人たちは赤嵌楼とか紅毛楼とか呼んだ。前出のヴァレンティンの『新旧東印度』4巻によれば「城は4方に五稜の煉瓦棟を設け、城壁を巡らし、幾多の建物および邸宅は全てそのなかにおかれた。城郭の外には、区画正しい街を設け、オランダ人および中国人の商家が立ち並んだ。城楼は高くよく市街を見下ろすことができた。城外の海に面するところにはさらに2カ所城郭を築いて防備のための外砦とした。砦の前は船舶の碇泊場所で 大小の帆柱が林立していた」とある。砦は西側を海に面し、南北と東側に市街が取り囲んでいたと考えられる。後世の赤嵌楼街から北隣の県口尾街・南側の大井頭街の一角がその中心であったと考えられる [伊能:598]。

2. 砦

当時建設されたいくつかの砦についてみておく。

バセンボイ砦：オランダ人は台江河口の外側に小砦を設けてバセンボイ砦と称した。場所は不明だが、中国人の言い伝えによれば青峰関砲台であるという。諸羅県志兵防志には「青峰関砲台は青峰関港口の南にあり、港外に南北に二鯤身港と沙線港があり、水は東に流れ蚊文港に入る。県を治める第一の要地である。オランダ時代に築かれた」とある。また、「青峰関砲台は蚊文港口にあり」とも述べられており、青峰関港は蚊分港で異名同地である [伊能:600]。

サン・サルバドル城：1626年スペイン人は、それより2年前にオランダ人が台湾南部を領有したのに刺激され、北部を根拠地にしようとするルソンからバシイ海峡を進み、台湾東海岸を通って島の東南の地を発見しサンチャゴと命名した。さらに北岸を踏査し基隆に達し、ここをサン・サルバドルと命名した。また、基隆港をサンテシマトリニダ、海岸沿いの漢人居住部落をパリアンと名付けた。サン・サルバドル海岸・港の後ろの300フィートの山頂・パリアンに近い海岸に合わせて4カ所の砲台を築き、これをサン・サルバドル城・サンテシマトリニダ砦・パリアン砦と呼んだ。1641年スペイン人はオランダの圧迫に抗することができず台湾を放棄したが、オランダ人は自らの足跡を基隆にまで及ぼし、ここに商館を設置した。南部が鄭氏に攻略された後もオランダ人のなかには基隆に駐留する者もあったという。その後1665年オランダ水軍の提督は一時清軍と攻守同盟を約し、サンサルバドル城を改修したが、鄭成功軍の進撃に遭いこれを放棄した [伊能:605]。

サン・ドミンゴ城：1629年、スペインは西北海岸を回航し、淡水港に入りカシドルと名付け、砦を設けてサン・ドミンゴと命名し、淡水江をキマゾンと呼んだ。ここには当時小さな漢人集落があった。スペインがオランダの圧迫により台湾を放棄すると、オランダ人はここも占有し、煉瓦と石とを積んで堅固な砦に修築し難攻不落と称し、商館を設けたが南部放棄とともに退却した。中国人は紅毛楼とか淡水砲城などと呼ん

だ [伊能:606]。

これらオランダ・スペインによるものは居住する都市としてではなく戦略上の砦として建設されたものであった。

台湾に現れた最初の植民帝国オランダは商業的利益を重視する方針の下に台南に交易積み換え港と商業の安全を確保するための砦とを建設したが、商人と軍人がここに駐留したのみであり、白人の入植者たちが居住する都市が形成されたわけではなかった。オランダが鄭成功に屈服し台南を放棄したのは1661年であったが、この時期はまさに本国がヨーロッパ「世界経済」のヘゲモニー国の地位を失い、ヘゲモニーは繊維工業を獲得したイギリスに移動しはじめたころであった。資本主義的植民地経営をおこない植民地都市を建設するのは日本であった。

オランダ時代台南に建設されたのは都市というよりは砦あるいは商品積み替えの倉庫であったといえよう。こうした城や砦がオランダ人やヨーロッパ人にとっての観光地になることはありえなかった。もちろん当時本国におけるレジャーや観光の状況に関する分析が必要ではあるが、アジア地域にはまだ国際観光の目的地になりえるような植民都市は成立していなかったことだけは確認することができる。

2章 日本による台湾植民地経済の形成

オランダが商業的利益を重視したのとは対照的にイギリスは資本主義的な利潤を求めてイギリス人自身が入植し、現地で生産・経済活動をおこない、彼らの居住に適した都市や農村を形成した。台湾において資本主義的な植民地経営をおこなった日本もまた、日本人に適した生活環境を持つ都市形成に向かったのである。本章では日本の台湾における植民地経済についてその概要を整理する。

1節 台湾の植民地経済関係

植民地経営の主眼を商業的利益においたオランダ型帝国主義と現地で商品生産産業を興し資本主義的利益を獲得しようとするイギリス型帝国主義の2類型に分類すれば、日本帝国主義は後者に属すると考えられる。しかしイギリスのセイロン経営がコーヒー・ココナッツ・茶などの農業商品生産のプランテーション経営が中心であったのとは異なり、米や果物などの農業産品生産に加え製糖工業や缶詰工業などの工業をも促進しようとした。ここでは日本と植民地台湾との関係について、とくに日本を中心とする経済分業、生産分業の視点から整理する。

まず台湾において生産される物品、商品の移動について注目する。台湾の貿易はそれ以前主に対岸の中国および香港との間でおこなわれていたが、日本の領有によって台湾

の貿易路は一変し、対内地（日本国内）貿易が外国貿易よりも大きくなり、外国貿易においても従来最大であった中国は激減しアメリカとの貿易が激増した [若林:207]。

台湾のような前資本主義的植民地に対する資本主義国＝日本からの働きかけは、その自家用生産を商品生産化し資本家的商品生産へと変化させることになる。いかなる生産物が商品化され、いかなる種類の商品について資本家的商品生産がおこなわれるのかは当該植民地内部の要求よりもむしろ外部、主として本国市場および本国資本の要求によって特徴づけられる。植民地の生産は輸出向け商品生産、とくに本国向け輸出品生産として特徴づけられ、往々にして単一耕作（mono-culture）の状況を示す [同上書:210]。これは矢内原の植民地経済に関する説明である。

台湾についてみるとその主要産品である砂糖は、1925（大正14）年度工業生産総額2億7650万円中1億6230万円（58.7%）を占めており、製糖の副産物である酒精は600万円（2%）を占めるが、これらは日本の台湾領有以前より既に商品化され、資本家的商品生産化されたことを示している。その他樟脳や茶はもちろん、米・バナナ・甘藷などについても商品化の傾向は顕著である [同上書:210-211]

表1 5大農産物の生産増加 (指数)

品目	1902 (明治35) 年	1912 (大正元) 年	1925 (大正14) 年
米 (千石)	1,693 (100)	4,047 (239)	6,443 (481)
甘蔗 (千斤)	683,158 (100)	3,159,599 (462)	8,839,833 (1294)
甘藷 (千斤)	501,160 (100)	1,131,767 (224)	1,908,915 (381)
バナナ (千斤)		12,027 (100)	267,642 (2379)
茶 (千斤)	12,764 (100)	22,379 (175)	20,904 (157)

注：1斤＝500g
出典：若林正文編『矢内原忠雄＜帝国主義化の台湾＞精読』岩波書店（岩波現代文庫）、2001年212頁

表1は台湾の5大農業産品について生産増加を比較したものである。純然たる輸出商品で、主として市場向けの甘蔗（砂糖）およびバナナを生産増加率が最も大きく、島内消費向けと内地市場を有する米・甘藷がこれに次ぎ、日本以外の外国向け輸出品である茶が最小である。このことは台湾の生産がいかに内地市場に依存しているかを示している [同上書212]。

通常植民地は本国工業製品の市場でありかつ本国に対する食料品の提供者としてその価値が認識される。すなわち、植民地貿易は工業対農業の貿易、精製品対粗製品の貿易である。重商主義的見地にあつては、植民地は本国のために存するのであるから本国の商品的な要求にもとづいて植民地産業の種類が限定されると考えられていた。しかし、植民地に対する投資は必ずしも商業貿易的見地に立つだけではなく、植民地産業発展から得られる利潤率をも考慮することになる [同上書:215-216]。

台湾における独自の工業発展を促すことは日本本国の工業製品の市場としての役割と抵触するわけではなく、基本的には台湾は日本の工業製品の市場でありかつ熱帯的特殊農業産品の供給者という基本的な構造が変化しているわけではない。

表2は台湾の重要貿易品、すなわち1925(大正14)年当時の価額100万円以上のものを、その価額の順に示したものである。

表2 台湾の重要な貿易品(1925年)

	品目(価額順)
輸出	茶・石炭・砂糖・綿織物・樟脳・酒精・セメント
移出	砂糖・バナナ・米・酒精・樟脳・檜材・樟脳泊・切り乾藪・パイナップル缶詰・石炭・模造パナマ・鯉節・食塩
輸入	油粕・肥料・砂糖・大豆・阿片・ガンガニー囊・木材・薬品・米・石油・包蓆
移入	米・綿織物および絹織物・金物・肥料・機械類・乾魚および塩漬け魚・小麦粉・するめ・紙・薬品・ガンニー囊・金属製品・木材・清酒・麦酒・紙巻き煙草・綿糸・メリヤス・マッチ・缶詰・石油・毛織物

出典：同上書，217頁

台湾の交易の特徴は次のように整理することができる。

- (1) 食料品・原料品を内地に供給して工業品、すなわち織物・重工業製品・肥料や雑貨などのを提供される。
- (2) 同種商品については上等品を内地に供給して下等品を移入している。例えば、蓬莱米を売り外米を買い、檜材を売って松杉材を買っているなどである。
- (3) 内地商品の中継地となっている。綿織物・海産物がそれである。
- (4) 台湾自身の工業の発展にともなって外国市場を開拓しつつある。砂糖・酒精・セメントなどの工業製品である。
- (5) 茶・樟脳といった特産品の輸出品を有している。

まとめて言えば、台湾は内地に対して工業産品対農産品の交換市場を提供するという植民地貿易関係の特徴を示しているとともに、自ら工業生産地としての地位を次第に獲得し、ただの中継貿易地としてのみならず積極的に外国市場への進出者としての地位を高めつつある〔若林:217-218〕。

台湾の重要移出産品である砂糖・バナナ・米・酒精などは内地市場において重要な品目になっている。台湾の砂糖生産は1897-98(明治30-31)年度68万担、内地への移出高は38万担で内地消費量の12%に過ぎなかった。1924-25(大正13-14)年度の800万担は日本帝国内の全生産の83.1%を占め、その移出高は740万担で内地消費高の67%を占めていた。台湾産砂糖の重要性が増したことがわかる〔同上書:218-219〕。次に内地食料が植民地米に依存する程度は増大して、台湾米は朝鮮米以上の速度で内地市場への供給が

増加している。また、大正14年の内地酒精産額5万2000石に対して、台湾からの移入高は7万2000石に上っているし、台湾の酒精6万4000石を中国市場に輸出している。バナナや樟腦など台湾特産品が内地市場を独占しているのは当然である。

内地からの移出品についてみるといくつかの特徴が指摘できる。綿織物および絹織物市場として植民地は7,800万円を買っているが、そのうち台湾は1,570万円である。内地の綿織物輸出額は4億1600万円になるので植民地への移出は16%を占めている。鉱産物および金属・金属製品・機械類など重工業製品の植民地への移出額5,820万円のうち台湾へは1,900万円、これに対して外国への輸出は5,770万円であり、植民地は外国市場より重要である。肥料についてはさらに顕著で、外国への輸出額が11万円であるのに対して朝鮮105万円、台湾は670万円移出している。したがって日本の重工業および肥料工業にとって台湾の重要性は明白である。[同上書:219-220]。

2節 台湾をめぐる交通システム

台湾の交通システムは植民地経営の必要にもとづいたものであった。すなわち、台湾各地で生産される物産を道路および鉄道輸送によって基隆もしくは高雄に集積し、両港から日本のみならず朝鮮・満州植民地、中国大陸・南洋そのほかにまで広がる航路によって運び出すシステムであった。ここでは鉄道網、港湾からの航路網についての状況を整理する。

鉄道網としては、1908（明治41）年4月南北縦貫鉄道工事は完成した。これは現在の山側路線で、後に1,500万円を投じて竹南－大肚間の海側路線を建設した。さらに、阿里山森林開発のために265万円を投じて阿里山鉄道が建設された。また1,400万円かけて塙東を通過して枋にいたる路線、および北部の蘇澳から八堵にいたる宜蘭線を建設した。花蓮－台東の台東湾鉄道を建設した。このような鉄道および道路網の完成によって南北輸送力は向上し、東西の関係も貫通した。

航路網については表3に示した。

表3 台湾の対外航路

<命令航路>

航路名	経営会社	運行船名 (トン数)
基隆－神戸線	大阪商船会社	蓬萊丸 (9,205)・扶桑丸 (8,118)・瑞穂丸 (8,511)
	近海郵船会社	吉野丸 (8,998)・朝日丸 (9,326)・大和丸 (9,750)
高雄－横浜線	大阪商船会社	
	近海郵船会社	
内地直行線	日本郵船会社	
	大阪商船会社	
台湾沿岸線		
東沿岸線		
西沿岸線		
台湾－支那線	大阪商船会社	
台湾－朝鮮船	近海郵船会社	神州丸 (2,884)・第二養老丸 (2,220)
基隆－香港線	大阪商船会社	鳳山丸 (2,347)・広東丸 (2,568)
香港海防線	大阪商船会社	孟那多丸 (2,165)
基隆－大連線		
基隆－南洋線	大阪商船会社	
基隆－ジャワ線	大阪商船会社	泗水丸 (4,391)・巴城丸 (4,392)
基隆－廈門線	大阪商船会社	大球丸 (1,517)
打狗－広東線	大阪商船会社	
打狗－大連線	大阪商船会社	

<自由航路>

横浜－高雄線	大阪商船会社	
	山下汽船会社	
	川崎汽船会社	桃園丸
基隆－那覇線	大阪商船会社	奉天丸 (1,749)
台湾－北海道線	川崎汽船会社	高雄丸 (3,209)・呉淞丸 (3,090)
打狗－横浜線	日本郵船会社	
	大阪商船会社	
基隆－大阪線	大阪商船会社	
基隆－横浜線	大阪商船会社	

出典：蔡采秀「日本の海上計略與台湾の對外貿易 (1874-1945)」黄富三・翁佳音『台湾商業傳統論文集』台北，中央研究院台湾歴史研究所籌備処，102-103頁

3節 台湾に移住した日本人

日本人植民者としてはどのような人びとが台湾にわたっているのか。スリランカにおいてプランターたちは自らの力でジャングルを切り開きプランテーションを開発していく姿も見られたが、日本人の台湾植民にはこれに対応するような農業移民者はどの程度いたのだろうか。そのほか商業や工業に参入する日本人たちがいたのではないか。ここでは移住した日本人に関する資料を整理する。

まず、台湾に移住した日本人の数を追っておく。

表4 人口移動

	日本人人口 (%)	外国人	合計
1905 (明治38) 年	59,618 (1.19)	8,223	3,123,302
1921 (大正10) 年	174,682 (4.55)	28,482	3,835,811
1925 (大正14) 年	189,630 (4.57)	33,258	4,147,462
1926 (昭和元) 年	195,769 (4.62)	35,505	4,241,759
1927 (昭和2) 年	202,990 (4.68)	39,953	4,337,000

出展：若林、前掲書

矢内原忠雄は台湾島民および移民した日本人について関して次のように概観し、9つの階層に分けて整理している。

まず概観である。管理人員・資本家およびそれらに従属して移住したものが台湾在住内地人の基礎であり、根幹である。本国からの管理人員・会社員・労働者の移住があった。台湾はまだ近代的政府および資本家的企業の使用人や労働者が習熟していなかったからである。したがって、巡査も内地より募集し、彼らにともなって大工・左官が、資本家によって炭鉱企業がおこると内地の炭鉱夫が、水産企業がおこると漁民が、製糖企業が興ると労働者や農民がこれに従って移住したのである。9つの階層についてそれぞれ整理する。

- (1) 資本家階級：内地人および本島人を含む資本家がいた。
- (2) 農民：農業者は台湾総人口の58%を占め、その大部分は自作兼小作者および小作者である。これらの農民は台湾の資本主義化にともない資本主義的土地関係に転入させられた。特に製糖会社の所有する土地の甘蔗園における農民は純然たる農業労働者となった。会社所有地の小作の場合も会社の指揮監督の下で甘蔗耕作に従事する義務が指定されるので小作の経済的本質はむしろ会社や工場における労働者に近いといえる。会社との間の工作資金前借り制度によって農民は責任量を栽培する義務を負い、原料採取区域制度によって当該区域の製糖工場にのみ生産物を売り渡すのであり、かつ製糖原料以外にこれを使用することも禁じられ、買取価格は会社

が一方的に決定するから甘蔗農家は会社と特別な従属関係に立っている。

製糖会社以外にも拓殖を目的とする会社農場などもあり、その農民は資本家的企業に関連せしめられている。農業作物として甘蔗・茶・パイナップルなど工業原料が多いのにしたがって、これら農民もまた資本家的企業の賃労働者もしくはこれに近い性質を与えられている。

台湾農民の大多数は本島人である。明治42年ころ西部台湾において農場が開設され内地農民の移植による開拓耕作事業を目的としたが、内地移民の計画は失敗した。同じころ東部台湾においても同様な計画がおこなわれ、花蓮港庁には吉野・豊田・村田の3村が官営移民村として建設され、台東庁には台湾製糖株式会社の手により旭村・鹿野村・鹿寮など数村が私営移民村として建設された。しかし、これらの内地移民村の人口は3,300人に過ぎない。東部台湾にはなお生蕃が米作・甘蔗栽培に従事し台湾産業の中心たる西部においては農民のほとんど本島人のみである〔同上書:166-167〕。

- (3) 漁民：内地からの移民した者が比較的多く、特に東海岸蘇澳を中心として漁業移民村の建設を見た。昭和元年以来、漁業および採藻に従事するものうち内地人は4,230人、本島人122,885人である。
- (4) 鉱夫：内地人462人、本島人18,729人で、ほとんどが本島人である（昭和元年末）。
- (5) 工業労働者：大正14年末工場職工使用者中（官営工場・鉱山を含まず）内地人2,430人、本島人46,083人、外国人（中国人）1,310人であった。
- (6) 中産階級：台湾では土地集中が内地ほど進んでいないので、有力な中産階級が存在している。彼らは製糖会社に対する甘蔗栽培者として往々農民階級と共同利害を有している。大資本家としては内地人がほとんど独占的に台湾の経済および政治を支配する勢力を有するが、中小の地主および商業者としては本島人が内地人を圧倒する可能性がある。
- (7) 会社員：大資本家的企業の使用者である会社員階級はほとんど内地人の独占に属し、内地資本系企業はもちろんであるが華南銀行のような本島人資本系統の企業においても本島人行員は6%に過ぎない。常務取締役より下級社員に至るまで経営の実地に当たるものはほとんど内地人である。本島人の知識階級（学校卒業者）が存在しないからではなく、彼らを使用しないからである。企業の俸給生活者は内地人の独占である。
- (8) 官吏・公務員：内地人の独占である。台湾の内地人官吏は加俸があり、恩給年限は短く、生活は容易、権力は大きく、利権は豊富にして衛生状態が改善されたためまさに官吏の楽園である。退職後は島に留まり居住する者も多く、会社・農会・農業倉庫・同業組合・水利組合・市街庄などの機関は退職官吏の収容所のようなものである。
- (9) 自由職：教師・医師・弁護士などにも内地人が比較的多数従事しているが、本島

人医師も多い。

大体において官吏・公務員・資本家および使用人（会社員・銀行員）は内地人の独占であり、彼らの背後には内地における政府および資本家の強権がある。農民・労働者階級は大部分が本島人である。中産商工階級においては内地人と本島人とが相競争し、自由職業にあつては両者並立し、本島人もまた有力な勢力となっている。内地人は総督府および大資本家的企業を独占し、従つて政治的・経済的に台湾の支配者である [若林:158-171]。

日本人のほとんどは台北・高雄・基隆などの都市居住者であり、それらの都市を中心にして日本人居住に適した都市建設が進められた。次に最大の日本人コミュニティーが形成された台北市の発展についてみていくことにする。

3章 台北における都市形成と市民生活・レジャー生活

前章では台湾全土における日本の経済活動や植民地建設を概観してきたが、3章ではその中心都市台北がどのように日本人にとって良好な生活空間として建設されてきたかに注目する。1節では台北市の人口について、2節では中国人との分居状況、3節では日本人にとっての快適な空間としての台北市、そして4節では日本人のレジャー活動について整理する。

1節 台北の人口

ここでは台北市の人口移動についていくつかの資料を示す。まず陳正祥『台北市志』のデータからみておく。

1896年日本が台湾を占領した翌年、台北の人口は46,710人で、そのうち大稻程が最大で49.6%を占め、次は萬華で42.2%、城内区域はわずかに8.2%であった。当時全人口中本省人が42,454人（91%）で、日本人は4,256人（9%）にすぎなかった。

1904年当時台北の人口は85,890人に達し、全省最大の都市になっていた。大稻程48,587人で56.5%を占め、萬華29,165人で34%、城内に8,138人（9.5%）であった。大稻程1区で台南の人口を超えていた。当時台南は46,802人で、外港の安平の5,420人を加えても52,222人であった。

1916年末台北庁誌によれば、台北の人口は10万人を超え、1896年の2倍以上になっていた。合計で102,249人でそれぞれ大稻程56,037人（54.8%）、萬華34,948人（34.2%）、城内11,264人（11%）であった。

1920年台北は市となり、市区の範囲を拡大して人口も164,329人に増加した。1930

年にはさらに240,435人になった。1938年松山を編入して全市人口は328,162人になった。1940年全市人口は353,744人、日本統治最後の1944年には401,497人であった。

[陳,1997:11-12]

次に『台北市史』によって台北に市制が敷かれる前後からのデータをみておこう。台北市が作成したデータに依拠しており、市民を内地人（日本人）、シナ人・本島人・朝鮮人などに区分している。

台北市に市制が実施される直前の1919（大正8）年末の戸数および人口は、戸数29,424戸、人口112,970人であった。市制を実施した1920（大正9）年、および5年後の1925（大正14）年、9年目の1929（昭和4）年末の戸数および人口構成を示したのが表5・6・7である。

表5 1920（大正9）年9月市制実施時期の戸数および人口

戸数	内地人	13,721戸	本島人	25,973人	朝鮮人	8戸
	支那人	2,649戸	その他外国人	29戸	合計	42,390戸
人口	内地人	46,153人	(男 24,280人・女 21,875人)			
	本島人	115,600人	(男 58,544人・女 57,055人)			
	朝鮮人	16人	(男 15人・女 1人)			
	支那人	9,176人	(男 7,130人・女 2,045人)			
	その他外国人	55人	(男 33人・女 22人)			
	合計	171,002人	(男 90,002人・女 80,000人)			

(93頁)

表6 1925（大正14）年 台北市の戸数および人口

戸数	内地人	15,219戸	本島人	28,597戸	朝鮮人	4戸
	支那人	3,501戸	その他外国人	55戸	合計	47,181戸
人口	内地人	52,352人	(男 67,388人・女 24,188人)			
	本島人	134,168人	(男 67,388人・女 66,780人)			
	朝鮮人	55人	(男 22人・女 33人)			
	支那人	11,961人	(男 8,791人・女 3,170人)			
	その他外国人	93人	(男 50人・女 43人)			
	合計	198,629人	(男 103,715人・女 94,914人)			

(93頁)

表7 1929（昭和4）年末 台北市の戸数および人口

戸数	内地人	18,268戸	本島人	31,873戸	朝鮮人	19戸
	支那人	4,490戸	その他外国人	52戸	合計	54,702戸
人口	内地人	64,898人	(男 34,193人・女 30,705人)			
	本島人	153,353人	(男 76,576人・女 76,776人)			
	朝鮮人	94人	(男 40人・女 54人)			
	支那人	14,933人	(男 10,245人・女 4,688人)			
	その他外国人	94人	(男 54人・女 48人)			
	合計	233,371人	(男 121,108人・女 112,263人)			

台北の人口構成を見ると、本島人の人口が非常に多く、総人口の約半分弱、内地人は約4分の1弱、支那人が2割、朝鮮人や外国人はきわめて少数である。内地人は母国から渡来した人びとで、女の数が少ないのは当然、しかも大部分が官吏か官庁関係の人びとならびにその家族、会社員・銀行員・商店経営者といった順で、台北がお役人本位の地、とくに城内の商店が官界人を顧客の主なものとなっている。[台湾市史:94-95]

朝鮮人は一般労働者たちで、女は娼妓酌婦といった売娼婦の類だといわれ、男より女の方が多いいのはこれに起因する。支那人は労働者とその家族で、女が少ないのは出稼ぎ者が多いからである。彼らは故郷が動乱続きで不安なのと銀安の関係で出稼ぎ者が激増しているのである。その他外国人は茶商ならびに関連した欧米人で、とくにアメリカ人とその家族、それから宣教師や学校のお雇い教師とうで、男より女が少ないのもこの事情からである。[同上書:96]

2節 日本人と台湾人のすみわけ

日本人は台湾人居住地区とは別に、日本人居住区を形成し、独自の日本的で心地よい生活空間をつくっていた。

日本統治時期、台北市の日本人が集中している区域と本省人分布が集中している区域は分かれていた。日本人が分布していたのは市郊外の東南部で、旧城内区とその東側・南側の郊外であった。大正町・明石町・文武町・書院町・乃木町・旭町・福住町・新栄町・佐久間町等の90%以上が日本人であった。また、日本人が80%を占めていた地区は北門町・表町・大和町・千歳町・龍口町・西門町・末広町で、いずれも特別な地区で建物はすべて日本式であった。

これに対して本省人は郊区の外の太平町・永楽町・大橋町・港町・日新町・下奎府町・蓬萊町（以上旧大稻埕地区）、入舟町・有明町・龍山寺町・緑町・（以上旧萬華地区）で、80%以上が本省人であった [陳：18]。

次に、当時の台北の街の様子を表現した文章を『台北市史』からみておこう。

内地から渡航する者漸次多きを加えたが、鉄道の発着の関係上、最初は大稲程に來たり、六角街や港辺街、今の港町から泉町辺に多く居住し、内地人を顧客とする商家酒旗亭等々があった。城内は官衙町として従来通りであったから、ここには官人その家族ならびに官衙関係の商人その他が多く、本島人の商家は領台前も少なかったが、内地人の來往する者多きに従って減少するに至った。萬華はその当時内地人の來往者きわめて少なかったが、台北の進展發達するにともない城内の繁榮も影響してか大稲程から城内萬華と移ってくる者も少なくなかった。ただし、内地人の萬華方面への転出は、新起街八甲庄方面、すなわち今の新起町方面で、旧來の萬華街には及ばなかった。こうして大稲程萬華は本島人町と言われる通り内地人の居住する者は少ない。台北の町は新しき文明の光を受けて進展し、繁榮している。旧態依然たるは大稲程・萬華の一部で、文化的街観は実に整然と美しく、文明都市としても恥ずかしくない位で、内地から渡來した人びとは台北三市街の都市としての景観の大きなこと、立派で整頓とされていることに、予想外として稱賛の辞を惜しまぬ程で、領台前に比較して異常な進展ぶりを示し、台北の人びとは都会人として大きな誇りを有すると言ってよい。劉銘傳の巡撫衙門がおかれた地に総督府が置かれ、統治の中樞地として商業旺盛に文化の向上を遂げ、首都として隆昌ををみたのも官民協力向上に發展に、努めた結果である。

城内は内地人の官吏や商人が多く、彼らによって繁榮がもたらされた。爾來街観も城内がまず改善され美観を呈し、街区は整頓し前垣道は縦横に、主要街路としてその建物の堂々たるビル高樓が林立する景観は、あえて内地のそれに比しても遜色がない。城内は台北市内の中心となった。大稲程は台湾人商人多く台湾人によって商業が建設されたので台湾人の商取引や物資集散はすこぶる旺盛殷賑を極めていいる。表通りと言われる大道路はもちろん、商家軒を並べる商人街はいずれも新式の煉瓦積みの二階建てで、立派な商人街らしい景観を呈している。その他の街街は台湾人の普通住宅がみられ、それも多くは煉瓦積みの台湾人家屋である。

総督府政治の下、治安秩序が維持され、教育の向上普及、産業の進展、交通機関の發達等々の原因は、台湾の文化を著しく向上發展せしめたもので、こうした發展により内地との接触ももっとも密なるを加え、台湾は内地の延長とさえ言われるようになり、繁榮は年ともに著しく發展した。台北在住の台湾人は老齡者以外は、いずれも新時代の文明、東西から押し寄せ來る文化の浪に棹さして、向上と發展に努力し精進して活動を休止せぬ意気と力をもって動き働いているのは実に現在の状態で、文明都市の建設にと奮闘し首都在住の人として恥じざる大きな動きを示して励み奨めていることは尊い事実である。

台北の繁華に対しては、内地においても相当大都會と呼ばれるそれに匹敵すると言われ、台北の繁華殷賑を見てはじめて台湾の地を踏み、ここに來た誰もが異口同音に

その美しさとともに激賞して惜しまず、「台北がこれほど賑やかで美しいところだとは全く予想しなかった」と言って、驚きつつ褒め、「良いところだ、結構なところだ、内地の二流どころの都会以上だ」と言っては敬意を表す。

衛生設備、教育の普及、産業の進歩、警察消防の機関の完成、その他在住人に対する百般の施設は悉くよく行き届いたものであるが、こうなるまでは相当長年月を閲し、その間官民の協力一致の結果に他ならない。今や人口20有余万の多きに達し、なお増加傾向にある。昔は南方の遠い国と異郷視された台湾も、今は内地の延長とも言われ現代の文明は相互の距離を極端に短縮して、接触ももっとも密なるものに至らしめた〔台北市史:55-61〕。

台北は当初台北三市街と呼ばれていたが、大稲程および萬華が著しく発展し、繁栄するようになったので区別することなく台北市と一括して呼ばれるようになった。旧来の台北三市街の地域以外の大龍銅や加蚋仔、大安中崙朱厝崙と言った、隣接の地を合わせて市域に編入し、東西2里8丁、南北2里12丁、人口22万有余を擁する一大都市が建設された〔同上書:62-63〕。

3節 清潔・安全の日本人生活空間の完成

このように発展してきた台北の町が清潔で安全な日本人の生活空間となってきた様子を当時の『台北市史』の文章からみておく。

台湾を訪れる内外の人びとが異口同音に美しく明るい都会、文化的な都市であると推称する台北市は常に緑が滴り、常夏の国の都市として、深紅の花咲き、新緑の香る南国的情緒きわめて濃厚なところである。しかも在住する人びとは内地人と呼ばれる大和民族を経とし、本島人と称せらるる支那民族の新附の民を緯とし、それにわずかな同胞の朝鮮人とさらに少数の外国人や対岸支那から渡来する支那人とが織り込んで、ひとつの文様をなしている。

領台後数年にして、内地人の渡来する者多く、台湾の首都であり続けたので台湾人の方も人口増加し、それに従い人家が増築され3地区とも次第に街ができ、立派な幾条かの道路ができ交通が頻繁となって、3市街は合一した観を呈した。加えて南門一帯の地も明治末期から大正9年にかけての間に、内地人の住宅がおびただしく建てられ、ついに内地人外が建てられた。城内も田圃は消え官衙や病院・学校・官舎等も多く建てられ、商家も増加して立派な街観を呈した。現在では城内と呼ばれる地域は主として内地人の居住者が多く、島都としての行政上・経済上の諸機関はもちろん、公園・図書館・博物館等の文化的設備が行き届き、銀行・会社・内地人商店が軒を接して建ち並ぶ繁華な巷となっている。こうして、この地域は大体において近代文明都市

として立派な外観を備え、市街は煉瓦または鉄筋コンクリート造り2階・3階のビルが建てられますます外観美しく、道路も巾8間以上のタークレーの坦道は市街を縦横に貫通し、城壁を取り除いた跡には約25間ないし45間の巾のあるリングガーデンで、俗に三線道路と称し、これには遊歩道を設け、ところどころに円形もしくは半円形の小公園をも配して、その洒落た感じはほかには見られない光景である。大稲程もまた萬華と同様に本島人の居住者が大多数を占め、全地域が商業地帯で台湾の重要な輸出品たる米や茶の取り引き中心市場となり、家屋は概ね煉瓦造り二階・三階で巨商が軒を並べ、外国商館これに伍するといった具合に城内や萬華とは異なった情緒を出している。萬華街は煉瓦創りの台湾人家屋が多く、新しい新起町および西門町には内地人が多く、内地人の家屋が軒を並べている。西門町市場の八角堂を中心として夜は露天が店舗を並べ、散策の人で賑わう地帯およびその付近一帯の地は内地人経営の料理店・バー・カフェ等があつて盛り場を見せ、あで姿の芸妓衆も多くこのあたりに居住して往来し、台北における花柳界の気分を多分に漂わせている。さらに常設の活動写真館や劇場もこの方面にある。萬華には遊郭があつて河岸に立ち並ぶ10数軒の青楼からは夜の帷が垂れ紅燈に火が入ると弦歌の音がさんざめき、本島人外の一角に不夜城が出現する。この遊郭は内地人の遊郭である。淡水河の緩い流れに船を浮かべて船遊びする若者もあつて、水に親しむ、夏の夜は賑やかになる。常に小型のジャンク船が往復し、面白い風景が見られる。現在台北市は周辺地域を含んで、64町に区画され、南北警察署が分割している。大正11年に日本文の町名に変更された。

台湾の首府、総督府ならびに軍司令部の所在地たる台北市は、市の中央に総督府・高等法院・軍司令部等の官衙が集まっています、本島統治の中心を成している。他方、高等学校や専門学校をはじめ、昭和3年には台北帝国大学が開校し、学系の完備せるとともに台湾文化の源泉をつくり、しかも緑樹多く植えられ、緑滴り風薫る大都会としてまれにみる美しさを呈し、南国情緒豊かである [同上書：82-89]。

4節 レジャー活動・展覧会

台北市はまた人びとを興奮させる出来事やエキセントリックな娯楽の豊富な町でもあった。表8は市制実施以来10年間におこなわれた幾多の重要事項のうちの主なものを年度別に示したものである。

表8 台北市でおこなわれた重要事項（1920-1931年）

大正9年	第2回国勢調査。九邇の宮殿下来台の歓迎。
大正10年	駐英大使エリオット博士来台、英国軍艦や帝国第2遺外艦隊をみた。歓迎行事。フィリピン総督来台、歓迎行事。
大正11年	故山縣元帥遙弔式・明治大帝10年式祭遙拜式。台北七星海山新莊の1市3郡の蔬菜連合品評会開催。
大正12年	アメリカ観光団台北訪問。アメリカ練習艦隊来航。皇太子来台、台北6日間滞在。関東大震災への義捐金、罹災者の収容職業紹介事業。
大正13年	皇太子殿下御成婚奉祝祝賀会。1市4郡の蔬菜品評会開催。第1艦隊来航。皇太子殿下1周年記念日に台湾神社で献灯式、圓山運動場にて市内学校生徒児童連合運動会。財部海軍大将検閲使として来台北。家庭副業展覧会が植物園内商品陳列館にて開催。全国新聞協会大会開催。
大正14年	東園園芸研究会および品評会開催。秩父宮殿下の台湾訪問。大橋公学校開校。台北橋開通式。イタリア飛行機淡水到着。市制5周年記念懇親会開催。
大正15年	加藤首相遙弔式。高松宮殿下歓迎式。日本米穀大会開会。全国中等学校長会議開催。東門町に私営水泳上場落成、東門プール会場。市民講演会開催。北白川宮大妃殿下歓迎。12月昭和改元。
昭和2年	大葬儀遙弔式。1市4郡蔬菜家禽品評会開催。アメリカ観光団台北訪問。孔子廟棟上げ式。納涼展覧会発明品展覧会開催。朝香宮殿下歓迎。龍山寺新宮落成式。大正天皇1年祭遙拜式。
昭和3年	アメリカ観光団体北訪問。花卉盆栽品評会。朝鮮教育視察団訪問。九邇宮殿下来島。ドイツ軍艦基隆入港、軍楽隊演奏、台北訪問。航空船隊来航。ドイツ大使ゾルフ氏来台。基隆-台北間縦貫鉄道開通。日本西部水産大会。全国港湾大会。台湾美術展覧会。天皇后大典奉祝。
昭和4年	フランス大使・フランス極東艦隊幹部台北訪問歓迎式。英太子一行台北訪問。徳富蘇峰夫妻台北訪問。築地町に魚菜卸売市場創立。錦小学校新設。フィリピンの水泳選手を迎えて日比交歓水上競技大会が東門プールで開催。イ号61潜水艦乗務員・鹿児島県村長一行・救世軍山室少将等台北訪問。全国上水会議。在職10年以上小公学校教員表彰式。全国図書館長会議。大日本山林大会。東伏見宮大妃殿下が愛国婦人会総裁として来台。全島産業組合大会。
昭和5年	吉沢中国公使・荒木第6師団長・高田早稲田大学総長・アメリカ観光団・第1艦隊乗組将卒・イタリア軍艦および練習艦・帝国軍艦春日満州等の乗り組み将卒等台湾訪問。南門下水幹線工事起工式・高松宮御結婚奉祝会・建国祭・社会教化団体および納税功労者表彰式・明治橋新當地鎮祭・児玉総督25周年法要など開催。市営バス開業。実業界の納涼会開催。
昭和6年	九州台湾の海軍飛行機飛行。台湾放送局成立、台北放送局開始。

出展：『台北市史』台北市，成文出版社，1985年，68-73頁より作成

なかでも1923（大正12）年の皇太子の来台は植民地の日本人たちを熱狂させ、植民都市建設に弾みをつけることになった。そのときの皇太子の動きを整理しておこう。

皇太子4月16日基隆到着、台北の総督官邸に入った。台北市民2万人が提灯大行列で歓迎。17日台湾神社参拝、市内学校生徒児童の旗行列観覧、植物園内台湾生産品展覧会、中央研究所農事部参観、晩は宿泊所（総督官邸）で清楽演奏鑑賞。18日中央研究所・台北師範学校・同付属小学校・太平公学校・軍司令部・高等法院・台湾教育品展覧会（台北第1中学校）・医学専門学校参観。宿泊所で蕃人舞踏鑑賞、衛戍病院警察官および司

獄官練習所・台北工業学校。19日台北を出発して中南部および澎湖島を視察。24日召艦金剛で澎湖より基隆着、港内築港工事巡視の後台北帰還。博物館、圓山運動場における全島学校連合運動会参観。25日は草山北投に遊んだ。26日は歩兵第1連隊で閲兵式、専売局・第1女学校・武徳殿・第3高等女学校・圓山運動場で挙行の台湾体育協会主催の陸上競技大会観覧。27日台北出発、基隆より金剛で東京へ帰還 [同上書:77-78]。

6万人の日本人が快適な生活を送ることができる植民地都市台北はまた、日本人観光客にとっても安全・快適かつ楽しみの多い旅行目的地になっていた。

4章 温泉リゾート北投の発展

台北に居住する日本人にとって日々の娯楽やレジャー活動として特筆すべきは北投温泉であった。北投は昔から温泉が湧出していたが、オランダ時代も清代においてもこれを活用することはなかった。しかし、日本が台湾を植民地にすると官民軍が、日本人ばかりでなく台湾人にとっての温泉リゾート地へ発展させていった。

現在北投は台北市に属する北投区である。もともと北投という地名は平埔族の言葉で「巫女」を意味し、「八芝蘭」は温泉を意味していた。彼らはここに温泉が出ることをすでに知っていた。17世紀以降の北投に関する記録はいずれも硫黄に関するもので、温泉は「毒の水」と考えられていた。例えばオランダの文献には、「淡水河河口地域に相当高温で悪臭を放つ一帯があり、硫黄が流れ出している。風土はすこぶる悪くオランダ兵が時折死んだ」とある。1717年阮蔡文は「北港内の北投は鉱気が天に向かって噴き上げ、泉の流れは勢いがあり、湯量も多い。魚や海老はこれに触れると死ぬ」と書き残しているし、1918年連雅堂の『台湾通史』には「硫黄は淡水北投に産した。スペイン人は台湾占拠時期に硫黄を採掘し、毒を浴びて労働者の多くが病気になった」とある [洪徳仁, 2000:34]。1894年には、ドイツ人樟腦商人オーリー (R.N.Orly) が北投に来て温泉を発見し、ここにクラブを建設しようとしたが成らなかった。その翌年台湾は日本に割譲され、日本の支配するところとなったからである。

日本時代の北投温泉開発はいくつかの主体によって進められた。すなわち、第1に日本軍の療養地として活用され、第2には民間人による温泉旅館の開業があり、第3には一般庶民も利用できる共同浴場の建設、第4には総督府や台北庁による皇太子歓迎事業としての施設整備である。ここではこの4項目に分けて北投温泉開発の過程を整理する。

1節 軍の療養所

台湾人は温泉が健康の面で効果があることや価値があることを知らなかったのがこれを活用することはなかったが、日本支配が始まるとまず日本軍が温泉を活用し始めた。

1895年11月軍医総監藤田嗣章が樺山総督をともなって北投を視察し温泉を発見し土地を確保し「陸軍療養所」を設立した〔卓克華:2001,13〕。

明治30年4月北投に駐在していた工兵隊がある崖の下に沐浴可能な温泉を発見してそこに建物を建てて「台北陸軍衛戍病院療養分院」とした。明治39年11月まで分院として軍人が療養した。42年2月臨時の北投転地療養所が設置されたが2ヶ月間で閉鎖となった。翌43年3月に再度北投転地療養所が開設され、以後44年5月に「偕行社」浴場が新設された〔同上書:14〕。

1905年日露戦争が始まると大量の負傷兵の療養が必要となり、台湾総督府は北投に傷兵収容所を設立して温泉療法による療養およびリハビリをおこなった。旅順で負傷した兵士たちは海路台湾に向かい基隆に上陸して、北投まで送り込まれ療養した。このことは北投の発展に大きく貢献した〔同上書:14〕。

2節 民間人による温泉旅館開発

北投における温泉の利用は1896年に始まる。大阪人の平田源吾が旅館「天狗安」を開き温泉を商業的に利用し始めたのである。平田は1895年11月に数日間北投に滞在し、温泉での沐浴を楽しみ泉質の優れていることも認め観光的にも商業的にも価値が高いことを知り、最初の温泉旅館を開業したのである〔同上書:13〕。同年8月には台北軍政庁財務課長松本亀太郎も旅館「松濤園」を開業した。その後各種の旅館が雨後の筍のように北投温泉一帯に開業した。このうち、いくつかの旅館では温泉サービスのほか関連する芸妓や酌婦女性のサービスをも提供するようになった。これらは温泉観光地にはつきものであり、芸妓・酌婦管理組織も完備された〔洪:34〕。

1912（大正元・民国元）年当時の有名な温泉旅館およびレストランとしては、松濤園・新蒼芳など30軒ほどあり、浴室には瀧乃湯・湯元温泉等10軒余りあった。そのほか団体などが所有していたものとしては、揺光庵・名庵（台湾婦人慈善会経営）、有鄰庵（帝国婦人会経営）、台銀クラブ浴場（台湾銀行）、台湾倉庫療養場、偕行社浴場、新元記念館（鉄道部経営）等があった〔卓:16〕。

1929（昭和4）年にはクラブ10軒、料理屋旅館22軒があった〔同上書:15〕

北投は音曲の音が絶えず、嬌声が響くといった温泉情緒色濃い温泉街になっていった。夜を徹して客人を送迎し、深夜3時、4時でも車や馬は出入りし、電話はいたるところで鳴り響いていた。紅い灯りの下で、酒の香りは湯煙と混じりあい、三味線の北投行進曲が遠く近く聞こえ、歓楽の夜は過ぎていき夜明けとともに寂しくなるという有様であった。静かな明け方朝露を踏んで帰宅する芸妓の後姿もまた温泉街ならではの特別な景色であった〔洪:42〕。当時北投には「芸妓管理所」が設置された。設置前は客は各旅館を通して直接芸妓を呼んだが、設置後は一切管理所をとおした。1930年ころ北投の芸妓は1節20分で40銭、酌婦は1節25銭で、台北の芸妓が1節15分間で37.5銭と比べると

若干安価であった。

表9 1930年北投芸妓花代 (円)

項目	時間	芸妓花代	酌婦花代
朝花	6時-12時：8節	3.2	2
昼花	12時-18時：14節	5.6	3.5
夜花	18時-12時：16節	6.4	4
通花	1日24時間：50節	20	12.5
夜花+明花	18時-翌朝7時：20節		5
半夜+明花	21時-翌朝7時：18節		4.5
送花(技芸管理所費用)			

出展：洪徳仁編著『北投采風』台湾，人人月曆社，2000年，42ページ

表10 1932年当時北投の主な温泉旅館

日本人経営	藤の屋・松濤園・神泉閣・七起・松島屋・小西屋・新蒼芳・五十鈴・筑前座・天狗庵・長門屋・松屋・星の屋・養気閣・芭蘆・星の湯・大和・上の湯・八勝園・湯元温泉・桔梗屋・吉田屋・北投共同浴場・瀧乃湯
台湾人経営	松濤園・沂水園・清秀閣

出展：同上書より作成

1937(昭和12)年国立大屯公園が完成し北投は主要な地域になった。表10のような旅館があったが、なかでも星の湯は泉質最高であった。養気閣は第2次世界大戦期間には海軍休暇センターであった。台湾人経営の旅館の主な客層は台湾人が主で中南部出身の大商人たちであった。供される料理は福建式が主で、娯楽の演目も台湾人の趣味にあう南管楽曲や台湾語の歌謡などであった。これに対して、日本人経営の旅館は自然と日本人客が多く、館内で演奏されるのは三味線の伴奏による日本風の音楽であった。

総じて日本時代の北投は繁栄した温泉リゾート地で各種の温泉旅館や料理屋、クラブなど北投公園周辺に100軒を超えていた。高級店もあれば廉価な店もあった[卓:16]。

日本的な温泉歓楽型観光地が形成されていたといえる。

3節 共同浴場の建設

民間の温泉旅館が開発された当初、温泉旅館を楽しむにはかなりの費用が必要で、高額な消費活動ということにもなっていたため、これらを利用できるのは高官や富商たちに限られるような状況があった。一般市民はこのことに対して不満を持ちながら、北投溪の河原などで自然に温泉が湧き出ているところも見つけ、簡単に竹や木材で柵を造り無料の露天風呂を楽しんでいた。そのような現状を変え、市民も温泉を楽しむことのできる共同浴場建設への動きが出てきた。

1905年、台湾婦人慈善会が組織され、顧問の長谷川謹介などの人びとが「浴場改良

会」を結成して官署に対して公衆が使用できる共同浴場の建設を陳情した。この陳情は総督府民生官後藤新平の賛同と献金を獲得し、さらに台北の紳士たちの寄付により共同浴場建設が実現へと動いた。北投18ヶ所の湧出口から温泉を引いて衛生的で清潔な共同浴場を建設し、一般市民の利用に供した。翌1906年、6千尺（1尺=30cm）以上の温泉導管埋設工事が完成し、温泉の温度や品質が確定した。共同浴場周辺の土地も買い上げられ付属施設や遊園地が整備された。

1907年10月、台湾婦人慈善会は瀧湯（一般には湯瀧と呼ばれていた）を含む、旧共同浴場をその中に含む海軍用地の使用権を取得し、ここに1,000円を投じてそれまで露天であった瀧湯浴場を改修した。住民は共同して周辺に草花を植え、樹木を植えて環境の美化を行い人びとの憩いの場となった〔洪:35〕。翌1908年加藤台北庁長と村上彰一の努力と台湾婦人慈善会からの寄付金によって、瀧湯共同浴場の壮大な工事は完成した。

さらに1910（明治43）年、台北庁長井村大吉は湯瀧浴場を拡張して北投温泉共同浴場とする計画を推進した。1913（大正2）年6月に工事は完了し、同時に北投公園も建設された。公園の噴水池の前に建てられた井村の胸像は光復後撤去され「光復記念碑」が置かれたが、現在は孫中山銅像が建っている〔卓:14〕。

大量の市民が温泉入浴を楽しむことができるようになって、交通などのインフラ整備も必要であった。初期のころ北投温泉にやって来るには北投停車場から山道を登るか、もしくは麓を迂回するなどいくつかのルートを通して瀧湯浴場にたどり着くのがだった。瀧湯共同浴場の完成にともなって人びとの北投への温泉を楽しむ機会が増えたため道路の改修および橋の新設が急務となったのである。旅館などの業者たちは海軍幕僚に対して海軍用地内の道路を通れるよう陳情した。その結果1907年3月道路が開鑿され、架橋工事が始まった。ところがその年は大雨が続き、工事中の橋は流失した。臨時の土橋を造ってはみたがこれも雨水のため破損し、通行不能になってしまった。台北庁長加藤尚志の斡旋で山下秀實が橋の建設費用260円を献金し、鉄道部運輸課長村上彰一の意見を参考にして橋の流失の失敗を考慮して堅牢な架橋工事を計画した。橋の再建に必要な資材などは村上が提供し、台北鉄道部長新元鹿之助の監督の下に1909年2月末架橋工事は着手され、3月17日に完成した。建設費用を提供した山下秀實の名の1字をとって「實橋」と命名された。

道路開通後は定期バス路線が開設された。台北－草山－北投－台北のルートで台北周辺の人びとの温泉入浴客の足となった。

1916年には総督府は淡水線に新北投支線を増設し、北投－新北投間の鉄道が開通し、旅客の足の便がさらに改善され、新北投観光は飛躍的に進んだ。汽車で台北北門から新北投までの距離は7.6里、所要時間は35分、1時間に1本走り、運賃は20銭であった。1929（昭和4）年の「北投温泉のしおり」によれば北投駅の乗降客は1日平均1,000人余りで、その多くは入浴客であった。そのほか乗合自動車で行ってくる客も多く1日

100台にも達した [卓:15]。

4 節 皇太子来台歓迎のための施設整備

北投温泉の発展および知名度向上にとって皇太子来訪遊覧は大きな弾みとなった。台湾総督府はかなり早い時期から天皇の台湾巡視を要請していて、天皇の来島に備えて台北庁は巨額の経費を北投温泉地区に投入した。まず、1913年庁長井村大吉の下で56,000円を用いて瀧湯浴場を改修し、北投温泉共同浴場とした。これは静岡県伊豆産温泉の設計を参考にしたといわれる2階建て建築であった。1階は煉瓦造りで235坪、巨大な共同温泉風呂があった。2階は木造190坪あった [洪:35]。入り口は2階で、涼み場所と靴履き替え玄関がある。階段で1階に下りると男女の更衣室と浴室がある。重要な賓客のためには南側に独立した浴室と休憩室があった。館内で最も重要なのは男性用の大浴場で、周囲には列柱を配し、両側の壁にはステンドグラスがはめ込まれ、明るく華麗な沐浴気分を演出していた。入浴後再び2階に上がると、開放的な大広間があり籐の椅子にかけて食事をとることもできるし、将棋や囲碁をしたり、南東の角部屋では卓球もできた。ベランダに出れば北投溪河畔の山や水の美しさを楽しむことができた。夜7時まで営業していた [閻亜寧, 2001:83]。台北庁公共衛生単位が管理経営した。同時に共同浴場周辺の整備も行い、北投公園を建設した [洪:35]。園内には地形を生かして作られた曲がりくねった遊歩道、噴水池、七星拱橋があり、小さな催し物ができる広場もあった。

1923（大正12）年皇太子裕仁の台湾巡視を迎えるために特別休憩所を増設した。前のホールは4部屋に分かれ各部屋33坪、煉瓦造りである。木造の2階にも4間あり、それぞれ22坪であった。増設費用は17,000円であった [卓:15]。また皇太子歓迎のために北投-草山道路が舗装された。

1923年4月16日皇太子は台湾を訪れ、4月25日草山北投を遊覧した。滞在時間は長くはなかったがその後の北投地域の発展にとっての影響は大きかった。

皇太子視察の後台湾総督府は「皇太子殿下台湾行啓記念事業調査委員会」を設置して、3大建設事業をおこなった。そのうちのひとつは草山・北投を中心とする記念大公園「大屯国立公園」計画であり、1929年草山共同浴場が建設された。草山共同浴場には現地産出の安山岩が大量に使用され、淡水から職人が招かれ西洋建築技法による石切り方が採用された。広々とした共同浴場は男女浴室と八角形の浴槽があり非常に美しいものであった。現在の草山教師研修センターである [洪:64]。皇太子が訪れたということに加え前後の各種工事による施設の充実が進んだ北投温泉の名はさらに高まり、来客者も増え温泉旅館・ホテルなどの諸施設も増加した。

5章 植民地台湾における国際観光の成立

学校教育によって学童に新たなレジャー活動の内容とその習慣が形成され、総督府は50年にわたる支配の間に都市住民のレジャー活動のために多くの空間を設立した。そのなかでは、公園にかかわる施設、登山路や海水浴場、新たな信仰の中心になる施設などが顕著であった。ビクトリア時代のイギリスにおける中産階級に流行したレジャー活動が、明治維新期の日本にもブームになったのである。この風潮が日本による台湾統治によって台湾にもたらされたのである。

総督府の初期のレジャー空間開発の主な目的は、まず台湾を日本本国にとっての海外における遊楽場とすることであり、それによって資本家たちが台湾を訪れ投資をするよう引き付けることであった。

1908年縦貫鉄道が完成すると、台湾人武装反抗勢力の力量は弱体化し、総督府および鉄道運輸系統は積極的に観光サイトを開発した。具体的には鉄道部に「旅客係」を設置し、一般客運業務ばかりでなく観光資料の収集や宣伝にも機能を果たした。1910年鉄道部出版の旅行ガイドブック『台湾鉄道名所案内』では、鉄道沿線の重要な風景サイトおよび植民地政府にとって重要な施設に関する詳細な紹介がなされていた。総督府は観光資源が、資本家たちの台湾投資を促す環境を生み出すこと、および植民地統治の成果を肯定する意図を持っていた。1915年、台北市で開催された「始政20年勸業共進会」はその顕著な例である。この博覧会にはのべ80万人が来場し、日本の公卿たちも相次いで来台し参観した。さまざまな文章にも日本の台湾統治の成功の事跡が盛り込まれていた。総督府は来場参観者にたいして、台北の建設状況を見るだけでなく、中・南部の参加をもするように望んでいた。共進会パンフレットは、さながら小さな旅行解説書であり、島内遊覧に便利なものとなっていた。当時総督府が企画した観光路線は次のようなものであった〔呂, 365-366〕。

桃園庁：桃園街から大科次を経て、角板山の「蕃地」および安平鎮の茶栽培試験場・日本台湾製茶会社など、この路線上には桃園軽鉄会社の手押し軌道があり、角板山に到着できる。角板山には招待所があり、投宿も可能である。この共進会期間中にも、日本人・朝鮮人・中国人旅客がこの地を参観した。

新竹庁：樹杞林蕃地・苗栗・軍山の出砒坑油田・苗栗精油所・漢河などの地は導覧の中心である。

台中庁：市内の台中神社公園・水源地・公立中学校・物産陳列館・帝国製糖会社の工場
の他、鹿港・彰化・阿罩霧（霧峰）とうの地の遊覧の按排もあった。

南投庁：日月潭・埔社・林杞埔・草屯とうの地は地方政府の積極的な企画のなかの観光名所である。

嘉義庁：密布は嘉南平原にある各製糖会社工場が山間の重点である。このほか阿里山は

当時さらに積極的に開発された美しき旅遊地であった。

台南庁：台南市街のなかの古跡や自然は参観の重点に位置づけられている。台南庁においては安平港・塩呈塩田・大目降糖業試験所・橋仔頭台湾製糖会社工場もある。
阿緞庁：製糖工場・血清作業所・塀東公園などの地が主要な遊覧地である。

勸業共進会とともに行われた遊覧活動を通しての国内および国際的な宣伝の効果が良好であったため、観光と産業の販路との間の関係もまた、ますます重視された。1920年代中期以来の「南進政策」の台頭にしがって、国際観光旅行を通して、台湾の豊かな資源は南中国・南洋に向けても販売された。それはこの時期、観光事業に与えられた任務であった。当時の日本人旅客のために企画された遊覧路線としては、台湾西部一週間および18日間の2種の旅・環島7日間の旅、このほか地域的な短期旅行、例えば北部の角板山の旅・中部の日月潭の旅や阿里山の旅、および南部の北港行き等があった。全島にまたがる旅行システムはすでに存在していたのは明らかである。鉄道利用人口の不断な増加にともない、また教育が人びとの旅行への関心を引きだしたのにもなって、台湾人はますます鉄道を利用し、新しい風景ポイントを訪れるようになり、また往々にして鉄道で、各地の廟会活動参加し、総督府の誇る当地の成果をみる観光路線、1920年代以後次第に一種の市民サービスの再生産機能に変転した。この点についての明確な反映は鉄道部編『台湾鉄道旅行案内』の内容の変化に現れた。

1930年代以降に発行された『鉄道旅行案内』のなかに、この時期の観光ポイントを見出すことができる。日本が台湾に注目する内容がここにあるとはいえ、少なからぬ純粋な遊賞風景の紹介がある。例えば基隆の鼻頭角・社寮島風景ポイント、台北の淡水・碧潭・桃園山仔脚および樹林・三峡一帯の溪流釣り、新竹州の山脚・竹南海水浴場・香山の冬季の海潮見物・台南州新営の寿島海水浴場と台南市近郊の喜樹海水浴場、高雄市の寿海水浴場などである。鉄道部はこの種の景点に対してガイドブックで紹介しているばかりでなく、優待切符の発行をおこない、旅客を拡大させた。例えば、夏になると鉄道部は毎週土曜・日曜日に基隆・淡水の両地の海水浴場に赴く旅客に対して運賃を割り引きし、これらの海水浴場では毎週土曜には人びとが湧き出て、各市街の役場もまたこれらの海水浴場で、労働者のための慰安活動をおこなった。

鉄道部提供の優待切符は、特定の風景区への旅客に対してばかりでなく、特別の祝祭日出発の旅客に対しても提供された。鉄道部は1910年代初期、汽車で廟会活動に行く個人や団体に対して優待切符の発売をはじめ、私鉄との競争が激烈になった。しかし1923年以前、鉄道部が出版した『台湾鉄道旅行案内』には、さまざまな台湾の民間伝統信仰に関連する諸活動について紹介されている。しかし、その10年後（1932年）に出版された「旅行案内」にはサービスの対象はさらに拡大され祝祭日出発の香客や信衆に広がったことが掲載されているのである。

事実上鉄道が旅客動員する威力について、博覧会の際には大量の旅客を移動させた経験のなかから、台湾人は早くも、新たなレジャー生活経営する商売チャンスの方法を学んだ。学生時代以来の鉄道旅行の経験を通して、日治時代の台湾社会の指導階層は、鉄道がもたらしたレジャー文化の影響を受けた。

鉄道システムと接続できるレジャー空間は基本的に都市的活動を離れていたが、他方では市内においてもまた一種の新たなレジャー空間が創出された。公園である。

台湾の第1の公園は1897年総督府が裕仁皇太子来訪のために建設した「円山公園」であるが、本当に市民サービスのために創られた公園は1905年の「新公園」の出現に至ってからである。そののち総督府は、台北市に次々と公園を完成させた。川端公園(1910年)、北投公園(1912年)、新公園博物館(1913年)、圓山動物園(1916年)、植物園(1921年)、圓山運動場(1923年)、龍山寺公園(1927年)が相次いで建設され、公的な行事や学校行事などに使われるとともに市民の諸活動にも使われることになった。

このほか1930年代以降、戦争対応、防空疎散需要のために、また台北市の暑さを和らげるために、1932年以降計画された17カ所、437アールの公園用地があった。その他の都市では、1943年までに総督府は全島18都市に、計19カ所の公園を設置した。これらの公園はまだ市民に対してサービスするためのものではなかったが、一定程度レジャー的機能を発揮した。例えば、各学校の遠足の目的地となったし、体育活動の会場として使用されることもあった。新しい公園には、別に音楽堂・プール・児童遊戯施設も設置され、日治時代は市民体育大会の会場ともなっていた。

上述の討論からの知見。植民政府は新型のレジャー環境を提供した。時間的にいえば、週制度の出現、一種の重要性・短距離・短時間(安近短)のレジャーの段階、さらに空間的にいえば、道路システムが諸都市を連結し、近郊の風景観光活動に必要となる時間との関連して、レジャー時間の長時間化と符合する。同時に市区の改正は都市内に建設された新たな公園のシステムにおいて、植民者の活動の場所を提供した。制度上では、教育体系もまた、新たな台湾人世代に新たなレジャー娯楽の形式を創り出した。

当時のイベントとして、展覧会や品評会、スポーツ大会などが人びとに楽しみを提供していた。表11は当時台湾において開催された展覧会やスポーツ活動を年度別に示したものである。

表11 各種展覧会・スポーツ活動

年度	活動項目（数字は実施された月）
1901	10.台北物産品評会, 11.林本源邸遊覧会, 12.柑橘類品評会
1908	5.汽車博覧会, 10.縦貫鉄道全線開通, 10.台北物産共進会, 11.台北物産共進会
1909	6.安平海水浴場開場, 8.基隆海水浴場大沙湾開設
1910	2.全島ビリヤード大会, 4.全島自転車競技大会（台中公園）
1911	2.南部物産共進会, 2.南部物産共進会, 2.本島人断髮会（台北大稻埕公学）8.宜蘭袋米品評会, 9.桃園製茶品評会, 10.台中慈善演芸会, 10.台南慈善演芸会
1912	2.嘉義公園豚肉品評会
1913	1.全島自転車競技大会（台北新公園）, 2.番茶会（台北）, 2.短艇競争（淡水）, 5.北投共同浴場落成, 10.全島産繭および果物展覧会, 12.全島ビリヤード大会（台北クラブ）, 12.基隆高砂公園開園, 12.全島ビリヤード大会, 12.全島ビリヤード大会
1914	4.園山動物園開園, 11.農産物展覧会, 11.総督府医学校衛生展覧会
1915	1.北部野球協会発足, 3.全島写真展覧会（3日間）, 8.全島自転車競技会（台北）, 10.北部短艇競争,
1916	4.台湾勸業共進会, 北部短艇競技会, 4.圓山動物園開園, 4.全島囲碁将棋大会, 4.全島マラソン大会・全島芸林会, 5.全島テニス大会, 5.全島自転車競技会
1917	12.学校教職員製作品展覧会
1918	1.農産物品評会, 2.桃園製茶品評会, 2.奇術師天華一行公演
1919	10.台中水泳場開場, 10.奇術師公演
1920	6.嘉義副業品品評会, 6.陸上競技会, 7.嘉義・基隆市民大会, 7.宜蘭市民大会
1922	7.家庭工業品展覧会
1924	2.劇場永楽座落成, 2.台北西門市場野菜品評会, 高雄副産物展覧会, 6.台湾正米市場開始, 7.新竹機会製茶競技会, 8.蕉實品評会（台中）
1925	4.甘蔗増収品評会, 5.鎮南日曜学校開校, 6.始政30年展覧会
1926	3.中部台湾共進会, 12.新竹産業共進会, 12.台湾山岳会観音山発会
1927	6.台北納涼展覧会, 7.対中納涼会
1928	3.嘉義郡肥料品評会, 7.高雄海水浴場落成,
1929	1.東港郡物産品評会, 2.台湾マージャン大会, 6.台中納涼大会, 7.台南納涼週, 9.台北競馬大会, 11.基隆土産品展, 12.平安中学野球対抗戦
1930	3.台南市現地野菜競作会, 4.草山新共同浴場, 9.台北納涼大会（15日間）, 10.全島小公学教師陸上競技会

出所：呂紹理「日治時期台湾の休生活與商業活動」黄富三・翁佳音編『台湾商業伝統論文集』台北，中央研究院台湾史研究所籌備処，1999年，91-393ページ

このような都市的なイベントによって台湾在住の日本人および旅行者たちは，異国の中に花開いた近代的な日本人社会を満喫していたのであり，新たなレジャー活動の創造に向かっていたのである。

参考文献

東美晴「東アジアにおける観光とグローバリゼーション－台湾の日式温泉の事例から

- 」『流通経済大学社会学部論叢』第14卷第1号, 2003年
- 蔡采秀「日本の海上計略與台湾的对外贸易(1874-1945)」黄富三・翁佳音『台湾商業伝統論文集』台北, 中央研究院台湾歴史研究所籌備処, 1999年
- 陳正祥『台北市誌』台北, 南天書局, 1997年
- 弘末雅士『東南アジアの港市世界-地域社会の形成と世界秩序-』岩波書店, 2004年
- 洪徳仁編著『北投采風』台湾, 人人月曆社, 2000年
- 伊能嘉矩『台湾文化史 上・中・下卷』刀江書院, 1965年(復刻版)
- 呂紹理「日治時期台湾的休閒生活與商業活動」黄富三・翁佳音編『台湾商業伝統論文集』台北, 中央研究院台湾史研究所籌備処, 1999年
- 根橋正一「台湾における都市形成の過程と特徴」『流通経済大学社会学部論叢』第11卷第2号, 2001年
- 根橋正一「アジア諸国の国際観光社会学研究-ヨーロッパ<世界経済>と国際観光」『流通経済大学社会学部論叢』第14卷第2号, 2004年a
- 根橋正一「長崎の<世界経済>編入と国際観光-長崎・雲仙リゾートの成立-」『流通経済大学社会学部論叢』第15卷第1号, 2004年b
- 根橋正一「世界経済システムと国際観光」『流通経済大学社会学部論叢』第15卷第2号, 2005年
- 台湾省文献委員会編『台湾史』台北市, 衆文図書, 1996年
- 台南市文献委員会編『台南市志稿 地理志疆城篇』台北市, 成文出版社, 1983年
- 『台北市史』台北市, 成文出版社, 1985年
- 若林正丈編『矢内原忠雄<帝国主義化の台湾>精読』岩波書店(岩波現代文庫), 2001年
- 薛化元編著『台湾開発史』台北市, 三民書局, 1999年
- 閻垂寧「北投温泉浴場的建築與修復」『北投温泉博物館專刊』第1期, 2001, 台北市政府文化局
- 葉振輝『台湾開發史』台北市, 台源出版社, 1995年
- 尹章義『台湾開發史研究』台北市, 聯經, 1989年
- 章英華『台湾都市内部結構:社会生態的與歴史深討』台北市, 巨流図書公司, 1995年
- 卓克華「北投開發史的特色與転析」『北投温泉博物館專刊』第1期, 2001, 台北市政府文化局